ふるさと安曇野
きのう きょう あした

No.12 2014.10.04

いくさだ！そのとき民衆は…

桜の名所として親しまれている光城山

春は桜の名所としてにぎわう光城山。夏は軽登山や自然観察など、レクリエーションや憩いの場としても多くの人に親しまれています。

この山は「城山」と呼ぶだけあって、かつて城が築かれていました。といっても、天守閣がそびえ、高い石垣や深い水堀がめぐらされた城ではありません。空堀や土塁などが設けられた、戦国時代の山城です。

安曇野市内にはこのような山城が大小いくつもあって、今もその名残をとどめていますが、支配力に優れた大名や、勇名を轟かせた武将が知られているわけではありません。むしろ安曇野は、力の強い勢力の最前線にあって、大名たちの支配に従ったり、領主たちの勢力争いに、もてあそばれたりしてきた地域でした。

しかしそのなかでも安曇野の人々はしたたかな知恵とたくましさを持って生き抜いてきました。残された資料とともに、戦乱の中で、いのちを守りつないでいった人々の姿をのぞいてみることにしましょう。

◆◆安曇野で起きた大きないくさ◆◆

戦国時代のなかで、安曇野が大きな戦乱に巻き込まれた時期は２回ありました。

ひとつは、甲州（今の山梨県）の戦国大名・武田氏の侵攻のとき。戦国時代の中ごろの天文20年（1551）前後です。

もうひとつは、戦国時代の終わりごろの天正10年（1582）からの数年間です。天正10年３月、およそ30年間松本平を支配していた武田氏が滅ぼされ、信州は織田信長政権の勢力下に入ります。ところが、まもなく本能寺の変が起きて信長が亡くなります。混乱ののち、松本城主の小笠原貞慶が安曇・筑摩両郡の平定に乗り出しますが、越後（今の新潟県）の戦国大名・上杉景勝やそれに味方する勢力との争いが起こり、安曇野の人々はこれにも巻き込まれていくのでした。

この２度の戦乱のとき、民衆たちはどのように被害から逃れ、命や財産を守ったのか、たどってみたいと思います。

◆◆守る知恵①　権力にすがる◆◆

天正10年、織田信長が武田氏を滅ぼし、甲信地方を制圧したとき、安曇野の人々も織田の軍勢がやってくるということを恐れたようです。当時、軍勢が戦場などを移動する際には、近辺の村々が「乱取り」という略奪行為や、放火などの破壊行為の被害を受けることがよくありました。これは敵方の戦力を弱めることができたため、指揮官の武士たちもやめさせなかったようです。

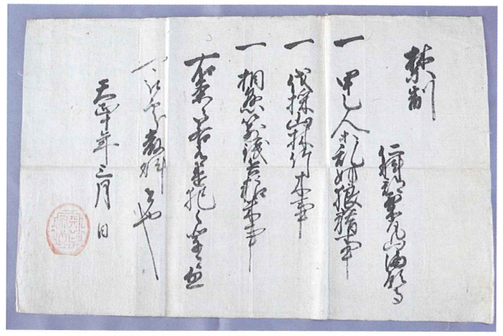
また略奪をする者たちにとっては貧しい生活から少しでも抜け出すための手段でした。略奪する側も生きていくために必死だったのです。

安曇野のなかにも略奪や破壊行為を予測して、対策をとった人々がいました。

「禁制」の要求　穂高牧で古くから土地の人々に信仰されてきた満願寺に残されている文書の中に、織田信長が出した「禁制」という文書があります。

これは大名などが自分の配下の人々に対して不法・不当な行為をすることを禁止した文書です。

禁制は戦争以外の時でも出されることがありましたが、特に戦争の前後には、略奪や放火などの危険にさらされるおそれがあった村や寺社では、あらかじめ大名のもとへ出向き、禁制を出してもらったのです。



織田信長禁制（満願寺蔵）

満願寺に出された禁制では、次のようなことを禁止しています。

一　甲乙人等、乱妨狼藉の事
一　山林竹木を伐採する事
一　箭銭・兵糧米を相懸くる事

第１条の甲乙人というのは、身分の高い人も低い人も、ということです。あらゆる人が満願寺において乱暴することを禁止しています。

第２条は、境内の竹木を切ることの禁止です。城や陣地などを造る時に木材を強制的に取りたてることを禁止したのだと思います。

第３条の箭銭というのは「矢銭」とも書き、軍資金のことです。武力をちらつかせてお金や食糧を集めることを禁じました。

しかし、タダで禁制を出してもらえたわけではありません。いくらかかったか、はっきりしたことはわかりませんが、大金を支払って禁制を求めたことが知られています。

満願寺という場所　あとでも述べますが、このとき織田氏は、吉野郷（今の豊科吉野区）にも禁制を出しています。

ただ、満願寺が村と異なる点は、戦争を避けて境内に逃げ込んできた人々がいた可能性があるということです。中世には、神社や寺院のような神仏の領域に逃げ込むことで、それまでの普段の暮らしのすべてから一旦縁が切れると考えられていました。これによって戦争とも縁が切れるということです。

しかし一方で、戦国時代にはこのような寺社の特権を否定する動きもありました。織田信長による比叡山延暦寺の焼き討ちもその一例です。

満願寺ではそのことも考えて、境内と避難民の保護のために禁制を受けたのかもしれません。

権力にすがるそのほかの方法　ところで、武田氏が松本平に攻めてきていた天文21年（1552）、堀金を支配していた堀金氏が、深志城に到着した武田晴信にあいさつにやってきました。このとき堀金氏は安曇郡への道案内をしたのだと考えられています。

地元の領主でも大軍を率いてやってきた大名に対しては協力することがありました。おそらく、地域の住民たちも道案内などで協力する姿をみせ、自分たちが味方であり、乱暴や攻撃をする対象ではないことをアピールしたのでしょう。

禁制を出してもらった際に支払った大金は、大名の軍資金となり、軍勢がやってきたときに協力する姿勢を示すことは、現地にいる軍勢からの攻撃を避けることにつながります。

このように、大きな権力にすがるのもいくさの被害を避ける知恵でした。

◆◆守る知恵②　一族や村を守るための両天秤◆◆

大名を天秤にかける地侍　天正10年６月の本能寺の変後、小笠原貞慶による安曇・筑摩両郡の平定が始まりました。安曇野市域の村々には、百姓身分でありながら、軍事力も持っていた地侍たちが住んでいましたが、小笠原氏にとっては、彼らの協力が不可欠でしたし、村の実権を握る地侍たちにとっては、どの大名に従うか判断を下すことが、その一族だけでなく、村の人々の命運を左右する分かれ道になりました。

小笠原氏代々の歴史を記した『笠系大成』という書物によれば、三郷地域の地侍であった二木氏らが貞慶に協力したといわれています。

しかしこの頃、越後に近い安曇郡や筑摩郡北部の領主たちが相次いで小笠原氏に滅ぼされていました。敵方の上杉氏と内通して謀反を企てたというのがその理由です。それほどまでに小笠原氏の支配が安定しておらず、いつ支配者が替わるかもしれないという危機感があったのです。

そのことを示す古文書が、長野県立歴史館に所蔵されています。

上杉景勝朱印状（長野県立歴史館蔵）

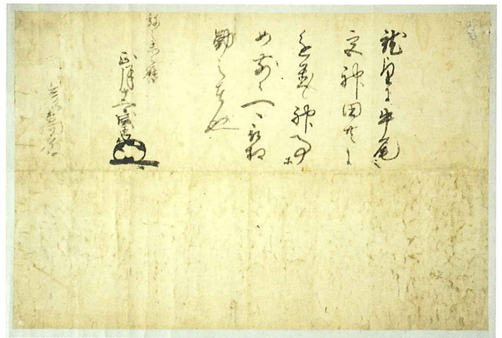
天正10年９月４日付で穂高有明の耳塚作左衛門尉という地侍に宛てられた文書です。耳塚氏が上杉氏に従うと言ってきたので、望みのとおり、小宮、岩岡、野口の地を与える、といった内容でした。いずれも松本市や大町市の地名ですが、上杉氏の勢力下には入っていません。安曇郡を占領したら、この３ヶ所を与えるという約束をした文

書でした。

先に触れた『笠系大成』によれば、耳塚作左衛門尉は、この９月のうちに小笠原方として合戦に出向き、最前線で戦死しています。

しかし水面下では敵方の上杉氏とも連絡を取り、新しく領地をもらう約束までしていたのです。

「牛尾の宮」の寄進状　天正11年（1583）正月、日岐大城（今の生坂村下生坂）の城主であった日岐織部佐盛直は、彦衛門尉という人物の求めに応じて、「牛尾の宮」とその神田を寄附するという書状を出しました。「牛尾の宮」は今の明科東川手にある潮神明宮のことです。また彦衛門尉は、麻績神明宮の神主の宮下彦右衛門のことだと考えられます。当時の潮神明宮は、麻績神明宮の支配下にあり、この寄進状も彦衛門尉が今まで管理していた神社と領地を追認するものだったと考えられます。



日岐盛直神田寄進状（潮神明宮蔵）

実はこのとき、日岐盛直はすでに日岐大城を小笠原氏に攻め落とされ、自分は上杉氏を頼って北信濃に逃れていました。それにもかかわらず宮下氏が盛直に寄進状を求めたのは、大きな勢力の間に挟まれて、あまりにも不安定な情勢のなかで生き残るための知恵であったのでしょう。

リスクが伴う選択　支配を受ける側の人々は、強大な軍事力を持っていた大名たちさえも手玉に取る、したたかな戦術で身を守っていました。

しかしそれは、一歩間違えれば一族が滅ぼされてしまうという、大きなリスクを伴っていました。

それにもかかわらず領主や地侍、神社までもが薄氷を踏むような選択をせざるを得ませんでした。自分の一族だけでなく、生活の基盤を置いていた地元の村全体の安全を図るためにはどうしても必要なことだったのです。

◆◆守る知恵③　逃げる◆◆

避難する場所　さて、いざいくさとなり、軍勢がやってくると、巻き込まれるおそれがあります。禁制を出してもらうには大金が必要となり、すべての村や寺社が出してもらえたわけではありません。どこか安全な場所に逃げたり隠れたりして身の安全をはかったり、財産を隠したりする必要がありました。避難先としては、遠方の親類縁者のところや、近くの山の中などがあったと考えられています。

山城へ逃げる　安曇野はもちろん、全国各地には山や丘の上に築かれた城・山城が点在しています。

山城を持つ領主も普段は平地にある館で生活していましたが、いざという時は城に籠もって戦うことができます。また戦時には、周辺の住民が逃げ込むこともできました。山城に逃げ込むことができれば、敵方に襲われずに済みます。また領主には領民を守る責任があったため、山城の中に入れて守っていたのです。

山城での避難生活　山城に避難した人々は、平和が戻って村に帰るまで、どのような生活を送っていたのでしょうか。

石臼の破片（左）と
炭化した穀物（上）
（こや城跡出土）

市内各地の山城跡から出土する遺物のひとつに石臼があります。また明科中川手のこや城跡からは、炭化した穀物も発見されており、麦ではないかと考えられています。

麦などをすりつぶして粉にし、団子状にして食べたのでしょうか。食糧をできるだけ節約する必要もあったと想像されます。

内耳土器
（上：鍋）
（右：ほうろく）
（鳥羽館跡出土）

山城や平地の館の跡から出土する土器のなかで特徴的なものに、内耳土器があります。これは、煮炊き用の鍋ですが、江戸時代初頭には炒ったり蒸したりするためのほうろく（底が浅く平たい鍋）の形をしたものも出てきます。鍋の内側には縄で鍋を吊るすための耳が付いていますが、これは火にかけたときに縄が焦げないようにする工夫です。

村が持つ城　山城を持っていたのは、領主だけではなかったようです。近年、村の住民たちが独自で持っていた城もあったのではないかと考えられています。

安曇野市内の山城では、まだはっきりしたことは言えませんが、明科中川手や東川手周辺には、小さな山城の跡が多数見られます。

現地を見ると、遺構と呼べるような、人の手が加えられた平地や堀などはごくわずかで、言い伝えがなければ、そこに城があったことすらわからないところもあります。このような場所は、『明科町史』などでは、会田氏や麻績の青柳氏といった周辺の領主たちの物見台だと推測されていますが、もう少し研究してみる必要があります。

例えば、当時の古文書に「けみの宮内助」という人物が登場しますが、その地元に花見城跡があるように、潮沢周辺に住んでいた数名の名前と住所が明らかになっていて、その近くに小さな山城が点在しています。これらの城が村の城である可能性もあります。

コラム①　安曇野市内の山城を歩いてみたら…

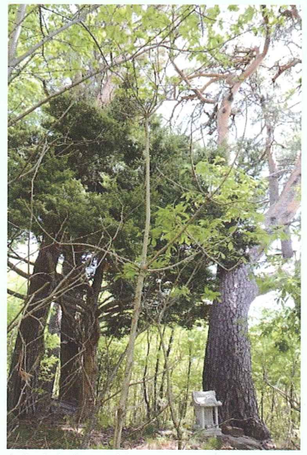
安曇野市内には、山の上に築かれた城の跡だけで25ヶ所ほど、さらに平地にある館や城の跡まで含めると、60ヶ所以上にのぼると考えられます。もちろん、すべての城や館が同じ時期に使われていたわけではありませんが、私たちに身近な場所にも山城や館の跡があります。

山城の跡には、曲輪といって、地面を広く削って平らにした区画や、防御のために深く掘った空堀などがみられます。その配置から、どこからの攻撃を防ぐことを想定していたのか、城の本来の目的が推察されます。

そのほか、城跡には後世の人が神様を祀った祠が建てられていたり、マツなどの巨木が植えられたりしています。

山の上からの景色が眺められれば、ほかの城や館の跡との位置関係も確認できます。周辺には、寺院の跡や石仏が残っていたり、古くから地元に住んでいる家の墓地があったりします。

山城の遺構だけでなく、そのまわりも歩いてみると、城が実際に使われていた時代から、廃城して現在に至るまでの歴史に思いを馳せることもできます。



梨子峯物見跡に地元の人たちが
建てた祠（明科東川手潮沢区）

花見城（明科東川手潮沢区）の山頂

山城の利用の変化　また一方で、避難するためだけの山城にしては、かなり防御を厳重にしている城もあります。例えば、堀金烏川の岩原城は、主郭（本丸）の背後に深さ10メートルもある空堀が掘られています。

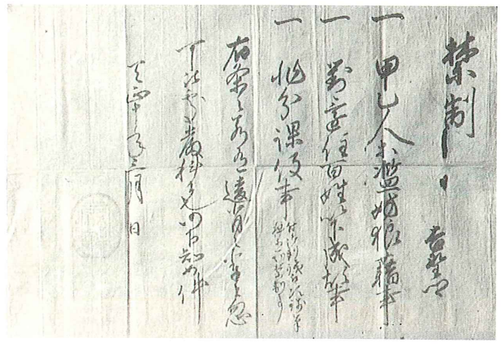
信州の山城は、武田氏による支配の時代を境にして、単に避難するための施設から、軍事拠点へと利用方法が変わったのではないかと考える人もいます。

いのちを守るための施設が、攻撃を前提とした軍事拠点として整備された例が安曇野にもあったのかどうか、今後の研究が待たれます。

岩原城（堀金烏川岩原区）の空堀

◆◆日常生活に戻る◆◆

禁制の手数料免除　先にもふれたように、織田信長は吉野郷にも禁制を出しています。これは天正10年３月の日付が入っていますが、甲信地方を制圧したあとに出されたものだと考えられています。



吉野郷へ出された織田信長の禁制
（『豊科町誌』より転載）

そこには「筆料（筆耕銭）」など、禁制を出すにあたって本来支払うべき手数料を免除することもあわせて書かれています。

それらの手数料をとらなかったのは、甲信地方の混乱を一日も早く終息させるため、村々に対して行った特別な措置だったと考えられています。

村の安全確保　また、その禁制には、「還住の百姓以下に対し煩いを成す事」を禁止する文言もありました。還住というのは、もとの住所に帰ってきて住むことです。帰ってきた百姓たちに金銭の提供を求めたり、不当な労働をさせたりしてはならない、ということです。この文言からは、吉野郷の百姓たちが戦乱を避けてよそへ避難していたことがわかります。

吉野郷の百姓たちは、避難先から早く帰りたかったと思いますが、戦争の余波で自分たちに被害が及ぶのを恐れたのでしょう。戦争が終わって、安全な日常生活を取り戻すために織田氏に禁制を求めたのかもしれません。

◆◆守りきれなかった山城◆◆

さて、いくさによる被害を回避するために、民衆たちはさまざまな方策を講じましたが、それが成功しなかったこともありました。

小岩嶽城の戦い――放火と落城　甲州の戦国大名である武田氏が安曇野への侵攻を行っていた頃のことです。

天文19年（1550）、武田晴信が松本平に侵攻すると、小笠原氏の拠点であった信州府中（今の松本市）の林城をはじめ、深志城や桐原城など松本市内の城が自落します。このころから、仁科氏や堀金氏など、安曇郡の武士たちの中にも武田氏に従う者が出てきました。

一方で、松本市島内の平瀬城と、穂高有明の小岩嶽城では抵抗が続き、武田軍の攻撃にさらされることになりました。天文20年（1551）10月24日に武田軍は平瀬城を攻略。武田氏の家臣が書いた記録『高白斎記』では、204名が討ち取られたと伝えています。

小岩嶽城が攻撃されたのは、平瀬城落城の３日後の10月27日でした。『高白斎記』には「小岩竹宿城放火」と書かれています。

『穂高町誌』によれば、「宿城」は、「本城」（現在城址公園になっている場所）と、その下にある小岩嶽の集落のことではないかと考えられています。小岩嶽城は公園となっているエリアの後ろ、急峻な尾根道をたどった山の上に詰めの城があります。集落や城が攻められたら、最終段階でこの詰城に逃げることも想定されていたようです。

さて、このとき武田軍は放火という破壊行為を行いました。小岩嶽の集落が成立した時期はわかりませんが、当時すでに現在のような城に近い場所に集落が位置していたのであれば、住民たちが住む家々にも大きな損害が出たはずです。

武田軍の破壊にもかかわらず、小岩嶽城では抵抗を続けていたようで、翌年には武田晴信自らが小岩嶽に出陣して攻撃を開始しました。『高白斎記』には「小岩竹攻、城主生害」とあります。小岩嶽城が攻められ、城主は自害したというのです。この時の城主は、古厩氏であったとも、小岩氏という氏族であったとも言われています。

小岩嶽城の悲劇　小岩嶽城の落城について、甲州の僧侶たちが書き継いだ年代記『勝山記』には、もっとひどい戦場のありさまが描かれています。

この年も信州へお働き候。小岩岳と申す要害をせめおとしめされ候。打ち取る頭五百余人、足弱取る事数を知れず候。

コラム② 小岩嶽城の慰霊祭

毎年、小岩嶽城跡では小岩嶽区のみなさんが中心となって「小岩嶽城址を偲ぶ会」が行われています。

小岩嶽城が武田軍によって攻め落とされた天文21年８月12日になぞらえて、７月下旬から８月上旬の間の休日に行われる戦死者のための慰霊祭です。小岩嶽城の城址保存会が正式に発足した昭和63年から続いており、地元のみなさんによって楽器の演奏や詩吟、剣舞なども奉納されます。

「偲ぶ会」が行われている城址公園は、昔は子どもたちの遊び場として親しまれていました。現在「偲ぶ会」のなかでも行われている子ども相撲は、昭和20年代にはすでに行われていたそうで、当時も地元のみなさんがお金を出し合って、子ども相撲を奉納したといいます。

小岩嶽城では、多くの戦死者が出ましたが、地元のみなさんは「死を覚悟で村を守ろうとした地域の誇り」として、感謝の気持ちを持って後世に伝えています。

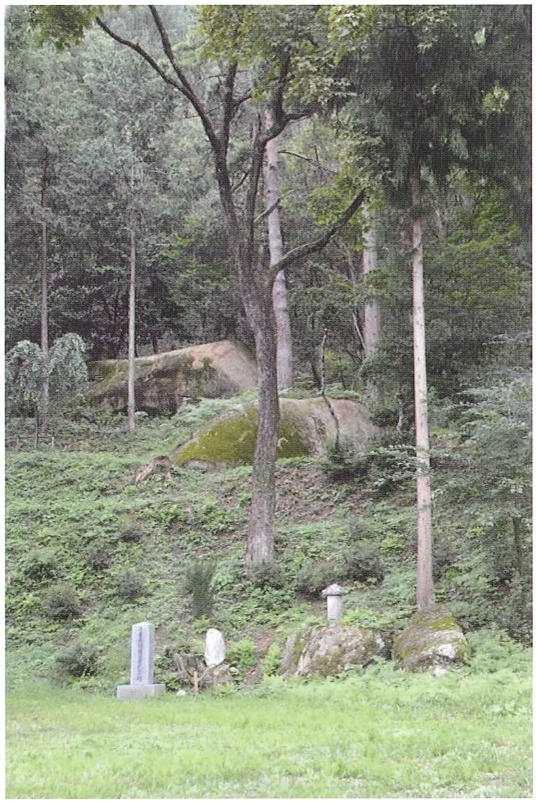
「小岩嶽城址を偲ぶ会」は、地域の親睦を深めつつ、郷土の先人たちのあゆみを知る行事なのです。

小岩嶽城址で行われている子ども相撲

（原文を読み下し、片仮名で表記された部分を漢字で補ってあります。）

小岩嶽城攻めでは、500人もの人が討ち取られ、さらに「足弱」と呼ばれた女性や子ども、老人たちが略奪されたと書いてあります。

小岩嶽城には戦闘員の武士だけでなく、非戦闘員の民衆も入っていたようです。山城は民衆にとっても、戦時に身の安全を守ってくれる避難所でした。城主以下の武士たちも、避難してきた住民のいのちを守るためにも籠城して戦ったのです。



戦死者の供養塔が立つ小岩嶽城跡

しかし、ひとたび城内に避難してしまったら、住民たちも敵方とみなされ、落城後は略奪の対象になってしまいました。

略奪された足弱たち　それでは、略奪された足弱たちはどうなったのでしょうか。小岩嶽城の足弱に関する記録はありませんが、同じ『勝山記』の別の箇所には次のように書かれています。

さるほどに男女を生け取りになされ候て、悉く甲州へ引き越し申し候。さるほどに、二貫三貫五貫拾貫にても親類ある人は承け申し候。

（原文読み下し）

これは天文15年（1546）に武田軍が佐久の志賀城を攻め落とした時の記述です。生捕りにされた男女は、甲州へ連行されたが、そのなかでも親類のある人は、2貫文から10貫文くらいの身代金を払って返してもらった、というのです。

身代金を払ってもらえなかった人は帰れません。彼らは「人買い」という奴隷商人に売り渡されたと考えられています。

森鴎外の小説『山椒大夫』は、日本中世の説経節「さんせう太夫」をもとに執筆されました。人買いから山椒大夫という長者の屋敷に売られて、奴隷として働いていた姉と弟を主人公にした物語です。いのちをつないで生きることは保証されているものの、奴隷が強いられる過酷な生活の一端を垣間見ることができると思います。

◆◆おわりに◆◆

安曇野といえば、堰の開削や貞享騒動など、江戸時代からの歴史がよく知られていますが、今回はそれより前の時代を取り上げてみました。

あまりなじみのない時代かもしれませんが、戦乱の世の中にあって、安曇野に住んでいた民衆たちも生き残りをかけて、さまざまな手段を尽くしてきました。その歴史は今でも市内に残る貴重な資料や、みなさんの近くの城や館の跡などから垣間見ることができます。

そんな先人たちの歴史に思いを馳せながら、光城山などを散策してみるのも面白いかもしれませんね。

「ふるさと安曇野　きのう　きょう　あした№12」
編集　安曇野市豊科郷土博物館
発行日　平成26年10月4日
〒399-8205　長野県安曇野市豊科4289-8
TEL　0263-72-5672　/　FAX　0263-72-7772
URL：http://toyohaku.jugem.jp/